

2014（平成26）年7月6日

旧制高等学校における朝鮮人生徒の文芸活動

永島広紀（佐賀大学）

はじめに

報告者は近年、戦前期の旧制官立高等教育機関（帝国大学・単科大学・高等学校〈帝大予科〉・高等商業学校・高等工業学校・高等農林学校など）に入学し、そして卒業していった朝鮮半島出身者の数的動向に関する悉皆調査を実施している。そもそも、このこと関心を抱いた直接のきっかけは、かつて白川豊・九州産業大学教授による「金史良」の旧制高校時代にまつわる佐賀大学での学籍簿調査¹に同行させていただいたことに由来する。



金史良（金時昌）は周知の通り佐賀高等学校文科乙類に入学し、さらに東京帝国大学文学部独逸文学科に進学（卒業後に大学院にも在籍）した朝鮮人作家である。なお、左の写真は佐賀大学学務部教務課が保管する旧制佐賀高等学校の学籍簿の中に残る、入学直後の時期と推定される金史良の肖影である（一般には未公開の資料）。

さて、ここで素朴な疑問として浮かび上がってきたのが、「**そもそも旧制佐高にはどのくらいの朝鮮人生徒が在籍していたのか？**」ということであった。そこで関係資料にあたるところ、1920年春の開校から1950年3月の廃止までの時期に相当数の入学者／卒業生（中退者）が存在していたことが明らかになった。ただし、この数が相対的に多いのか少ないのかは依然不明であった。

よってまずは近隣県の旧制高校（福岡高・五高・七高造士館）から逐次に調査を開始し、これを日本全国（台北・旅順を含む）の旧制学校を対象とする調査に拡大させていった。目下、旧制高校に関しては一応の調査を終了させており、他の旧制高等教育機関についても調査を続行中である。よって本報告はさしあたって帝国大学の事実上の「予科」であった旧制高校を中心とした考察であることを予め断っておきたい。

①収集資料について

ところで、「官立」の旧制高等教育機関を中心とする調査を行っている理由の一つとしては、当該の学校群が、朝鮮人「留学生」たちが大挙押しかけた在京の学校のみならず、北

¹白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」（『朝鮮学報』147、1992年4月／のち『植民地期 朝鮮の作家と日本』大学教育出版、1995年7月に収録）。

は北海道から南は鹿児島まで、まさに地方色が全面に出る諸学校に満遍なく在籍しており、特に高等学校卒業者の場合は、さらに各地の帝国大学に進学していることが確認出来るからである。帝大卒業後は朝鮮に戻り官公吏となる者が多かったが、前述の金史良のように「帝大卒の文士」となる者もいた。数は多くないとはいえ、日本統治期の、そして南北分断後の朝鮮半島において文学者たちと「旧制高校」「帝大」、そして学窓時代の日本語による「習作」問題は、これまでのところ個別の作家論の中では取り扱われることはあっても、「作家予備軍」「アマチュア文芸」までを対象とする本格的な議論が行われてきたとは言いがたい。また、京城帝大・同予科のケースは性格の相違からさしあたって今回の集計から除外するが、今後とも適宜に比較・検討したい。とりわけ兪鎮午や李孝石らの習作が掲載された京城帝国大学予科の文芸誌『清凉』の資料価値を見極めるためには、「内地」高校の文芸誌との比較的視点が必要不可欠である。

報告者が収集した基本資料は主として各旧制高校の文芸部や生徒寮が発行していた「学友会雑誌」「寮誌」の類である。報告者の調査では当初、あくまでも「補足的」「参考的」な資料として収集を行っていたのであるが、結果として朝鮮人生徒によって発表された創作物がそれなりの数に達することが判明し、また卑見では文芸作品としての水準も決して低くないものが含まれているということも明らかになった。報告では全体的な動向をまずは整理するとともに、次年度は個別作品の内容についても考察を加える予定である。

②旧制「佐賀高等学校」

佐賀高校は山形と同じく 1920 年に設立された「第十五高等学校」に数えられる地名スクールの一つである。同校出身者の特徴の一つは官吏志望者が多かったことであり、多くの行政官・司法官を輩出している。

朝鮮人入学者の動向として刮目すべきは「平壤高等普通学校／平壤第二中学校」出身者の多さである。1944 年 9 月までの卒業生（中退者含む）65 名中、その数は 20 名に達する。これに加えて、以北五道の学校、ないしは以北五道出身であることが確認される京城の学校出身者の数は 39 名を数え、全体の 6 割を占める。そして 39 名中の 14 名が京都帝国大学に進学し、さらにその中の 9 名が法学部に入学している。

なぜ、これほどまでに「西北人」が佐賀に殺到したのかについて、これを裏付ける明確な資料を見いだすことはいまのところ難しい。朝鮮半島に近い九州地方であることはその理由の一つであろうが、近隣の福岡や熊本には以北五道からの進学者はそれほど多くはない。むしろ熊本の第五高等学校には大邱高普（慶北中）出身者が多く、きわめて対称的な構図となっている。

それでも法科への進学者ではないものの、ソウル大で初代の工科大学長を務めた金東一の回想録が残っており、その理由の一端を窺うことが出来る。

金東一は平安南道・江西郡に 1908 年 3 月に生まれた。実家は自作農・果樹園経営であり、比較的富裕層に属していたと言える。平壤高等普通学校を卒業後、旅順工科大学予科を受験するも不合格となり、自宅での受験勉強をへて佐賀高等学校・理科甲類に入学したのが 1926 年 4 月である。佐賀高校卒業時（第 7 回：1929 年 3 月）に東京帝大医学部を受験するも不合格となり、1 浪後に工学部・応用化学科に進学している。東京帝大卒業後は無給助手を経て鐘淵紡績に入社し、平壤人絹工場に勤務していた。

사가고등학교에서는 3 년동안 줄곧 기숙사생활을 했는데 인종 차별 같은 것은 느끼지 못하고 비교적 자우롭게 생활할 수 있었다. 사가고등학교에서는 1 학기 첫학기만 성(姓)이 일본의 어순인 『아가사다(アカサタ)ー』 글자중 가장 빠른 학생이 반장을 하고 다음 학기부터는 투표로 정했는데 내가 줄곧 당선되어 졸업 때까지 반장과 축구부 주장을 하여 나름대로 학생생활을 보람있게 보낼 수 있었다.

この回想を読む際にはいくつかのポイントがある。まず「寄宿舎／寮」である。旧制高校の多くは新生生の生徒寮への入寮を義務にしているところが多く、「ストーム」をはじめとする独特な旧制高校カルチャーの主舞台であった。また反権力的な気風とともにリベラルな校風を誇り、一方でそれが「共産主義」「独立運動」の温床であるとして警察・憲兵隊は常に監視下に置いていた。そして旧制高校のカルチャーとして重要であるのが盛んな「部活動」である。運動部は言うまでもなく、理科や運動部所属の生徒も学内の文芸部雑誌にしばしば寄稿していたことが確認できる。金東一のみならず、各校の蹴球部で活躍する朝鮮人選手はきわめて多かった。ともあれ、旧制高校においては建前以上に平等・能力主義が貫かれており、さらに京城に対する対抗心や忌避感情からも以北五道出身者が特定の高等学校を目指したのではないかというのが現段階における筆者の仮説である。

さらに金時明・時昌兄弟のケースで考えてみたい。金時明は上記の金東一と同級であり、同じく平壤高普から佐賀高校に入学し、卒業後には京都帝大法学部に進学した。文官高等試験では行政科と司法科の両方に合格して朝鮮総督府に入庁し、終戦時の官職は本府課長級の専売局書記官（全州専売局長）であった。金東一の回想によれば、1945 年以降は越北したとされる。その弟である金時昌は、筆名の「金史良」で知られる小説家である。同盟休校事件で平壤高普を中退するが、旧制高等学校は「四年修了」の資格で受験が可能であったことから兄のあとを追って佐賀高校に入学し、卒業後は東京帝大文学部（独文科）に進学した。東京帝大在学時から本格的に創作活動に入り、「光の中へ」は昭和 15 年度上半期の芥川賞次点となり、『文藝春秋』誌には異例の「落選経緯」が掲載された。1945 年夏に延安の中共軍占領地に脱出し、のち金日成総合大学文学部の講師などを経て朝鮮戦争に従軍作家として参加している。そして当初の「快進撃」によって半島南部まで南下し、「海がみえる」などのルポルタージュを残すも、米軍の仁川逆上陸後に退却中、消息を絶つたと

される。

このように、佐賀高等学校には平壤高等普通学校の出身者、しかも兄弟で入学している例が他にも確認できることから、おそらくそうした送り出し学校側の受験指導なり縁故の線でもって入学を希望する受験生が多かったことが予想される。

③李佳炯と『怒りの河』（1995年3月）



ここで「日本語世代」の韓国人として最も最末期に帝国大学に進学した代表的な人物として**李佳炯**（1921. 03～2001. 10）を挙げておきたい。彼の日本語による著作である『怒りの河』（1995年3月刊）によれば李佳炯（岩本佳夫）は1921年3月の出生であり、全羅南道の木浦府出身であるという。光州西中学校（元の光州高等普通学校）を卒業後に熊本の第五高等学校（文科乙類）に進学し、同校を1942年9月に卒業後、すぐさま同年10月に東京帝国大学文学部仏文科に進学している。つまり高等学校は短縮措置に伴って2年半の在学であり、大学入学後1年にして学徒動員された世代ということになる。よって彼らの入学世代は卒業期を迎えていない。

入営後は5ヶ月間の新兵訓練を経て第一補充役の陸軍二等兵として「龍山野砲兵第26連隊」に配属された。同連隊には全羅南道出身の志願兵が21名所属しており、病気の2名と幹部候補生3名を除く16名がビルマに出征したという。彼が編入された第49師団山砲第49連隊第2大隊の出発日は1944年6月18日であった。なお、李佳炯の著作は人名や部隊名、あるいは日時に関する記述がきわめて正確であり、おそらくは軍隊手帳に詳細な日記をつけていたことが予想されるが詳細は不明である。ちなみに李佳炯は復員後の1946年から木浦高の教師を皮切りに、木浦初級商大副教授（1951年）・全南大副教授（1952年）・中央大副教授（1960年）を経て国民大教授を歴任し、また韓国推理作家協会の会長も務めた。

さて『怒りの河』はあくまでも学徒兵（臨時採用陸軍特別志願兵）として太平洋戦争に従軍した自らの体験を綴った回想録・戦記であるが、読み進めるとところどころに文学史研究の資料としても注目される記述が出てくるのである。

まず詩人・評論家でありサークル村運動で知られる谷川雁（1923～1995）との交友について、

隣の谷川は、いわば<不逞鮮人>になった私に関心を持ってくれた。ずばぬけた秀才の彼は年弱冠にして詩人であり評論家であった。入学早々、彼は歴史小品なるエッセイを発表したのだが、ちょうど「龍南」誌の編集部員であった私が選考の任にあたったものだ。（同書116頁）

と述べている。第五高等学校では上記の通り『龍南』なる文芸誌を発行していたのであるが、

しかし私はすぐに言語の壁にぶつかってしまった。私は朝鮮語を用いるのが当然であるのにその朝鮮語が口をついて出てこないのだ。……私は中学(私たち朝鮮人の中学は高等普通学校、略して高普と呼んだ)のとき日本の文芸書を耽読し、日本語の作文がうまいとほめられもした。詩文作りのまねごとしたものだ。しかし私はふしぎなほど朝鮮の文学書に疎かった。殆どその存在すらしていなかった。(改行)しかるに私が運よく日本の旧制高校の学生になったとき、私は自身が朝鮮人であることのプライドを意識するようになった。私は朝鮮語及び朝鮮文学を猛烈に勉強することになった。まず私は手当たり次第、朝鮮語の本を買い集め、片っ端から読みだしたのだ。その頃五高の高誌「龍南」に朝鮮語作家李孝石の「豚」という短篇を日本語に訳してのせてもらい、それがきっかけであつては「龍南」の編集委員ともなり、クラスの文芸グループの一員にもらったこともあった。私はあくまで朝鮮の作家となる覚悟をきめていた。しかるに朝鮮語で習作しようとしてみてもなかなかうまくいかないどころか全然行き詰まってしまうのだ。(同書 280 頁)

ここには李佳炯における「日本語／朝鮮語」での習作の問題、彼の「日本語能力」「朝鮮語による創作」などについての率直な吐露が確認できる。「二重言語」の段階を越え、すでに日本語での創作の方が楽になりつつある世代ということになるだろうか？ なお、文中に見えるように李佳炯は確かに『龍南』第 246 号(1940 年 3 月)に『「豚」(李孝石作)』なる翻訳を掲載していることが確認される。

おわりにかえて

報告者はいまだに結論めいたものを述べる段階にはないものの、以下に途中経過として現段階で考えていることを簡単に紹介することで本稿を締めくくりたい。

- ・ 作品はおおむね入学者数の多い学校にやはり残る傾向(山口・第三・佐賀)
 - ※台湾出身者の執筆はごく稀(創作はほぼ無いといってもよい)
- ・ 文理の別：圧倒的に文科の生徒(甲類・乙類に有意の差はなしか)
- ・ 出身地・出身校：以北五道出身者が多い(後掲の通り、これは全体的な傾向)
- ・ 年齢層：やや高めか(すでに成人してからの入学も多い)
- ・ 進学先：東京帝大が最多(必ずしも文学部志望ではない)
- ・ 北は青森、南は熊本まで、ほぼ万遍なく分布(大正中期に大幅増設された「地名スクール」にやはり多い)
- ・ 時期的な特徴：確認できた文章中、論説文として最古は金斗鎔(三高：1925 年)、創作としては韓圭鶴(成蹊高：1926 年、ただし演劇プロット)
 - 20～30 年代初には「植民地の現状」「貧困」「朝鮮人労働者」などプロ文学調の作品が目立つ：思想問題・治安維持法との絡みか、退学者が多い。

- ・ 30 年代以降：自然主義・ロマン主義・道徳論といった旧制高校生的な作品がやはり増えていく→質・量ともに充実：松本高の宋範儀は「寮歌」の作詞も手掛けるなど多才
- ・ 「半島文壇」紹介：翻訳作品数は僅かに 2 篇（四高の李漢基²と五高の李佳炯）、李光洙や李孝石 が取り上げられる。
- ・ 作家の世代論的な系譜整理が可能か？
 - （初期）李光洙や廉想渉ら …中等教育段階からの日本留学世代
 - （中期）金文輯や金史良ら旧制高校を目指す者たちの世代（城大予科出身の兪鎮午らもまずはこのカテゴリーか）
 - （末期）李佳炯ら学徒動員世代（1930 年代末に中学を卒業、高校は戦時繰り上げ）

² 李漢基（1917.09～1995.02）ソウル大法大教授。1987 年には国務総理代理を務める。

高校	発表誌	発表号	発表年月	筆者	ジャンル	タイトル	クラス	卒業回	卒業年月	出身校	進学先	その他	
弘前	『校友会雑誌』	15	1929年12月	呉徳淳	【創作】	「朴哲根と警部の息子 —一九一九年の風景—」	文甲	8回	1931年3月	光州		平北	
		25	1935年11月	朴哲浩	【論説】	「絶対的信仰のもとに」	文甲	14回	1937年3月	新義州高普		平北	
		26	1936年6月	朴哲浩	【論説】	「文学上の自由主義」	文甲	14回	1937年3月	東北中		平南順川	
	『弘高』	27	1936年12月	朴哲浩	【論説】	「人間の能動性」							
				朴哲浩	【論説】	「人間存在の辯證法的考察」							
				朴哲浩	【論説】	「偶感断篇」							
				朴哲浩	【論説】	「偶感断篇」							
山形	『校友会雑誌』	11	1925年11月	裴翊禹	【論説】	「物自体の問題」	文乙	4回	1926年3月	仙台一中	京文		
		13	1927年1月	朱秉建	【論説】	「HYPERIONについて」	理乙	中退		青山学院			
第二	『尚志』	146	1930年12月	崔三南	【論説】	「大學獨立論 —その願望 跡を史の上に辿りつて—」	文一		1931年3月	順天中			
浦和	『學友會雜誌』	14	1930年7月	李弘植	【翻訳】	Powell Millington「アボアの追跡 (On the Track of the Abor)」	文甲	7回	1931年3月	府立一中	東文		
		32	1940年9月	金渭錫	【創作】	「初春」	文甲	18回	1942年3月	横浜一中	東文(哲)		
成蹊	『こみち』	17	1926年12月	韓圭籍	【創作】	「闘ふ者」	文乙	2回	1928年3月			東経	
		33	1933年6月	李快洙	【論説】	「形式論理學の一考察」	文乙	7回	1934年3月				東経
武蔵	『校友会誌』	14	1932年2月	鮮于亨荀	【漢詩】	「浴四萬温泉」	文甲	5回	1933年3月	武蔵高専理科	京法	平塚府	
		15	1932年6月	鮮于亨荀	【漢詩】	「奉贈山川先生」	文甲						
		2	1932年7月	鮮于亨荀	【隨筆】	「慎獨發生活を顧みて」	文甲						
富山	『青冥』	14	1937年12月	洪性珍	【隨筆】	「偶感」	文甲	13回	1940年3月		東法(政)	全南木浦	
		16	1938年6月	金錫宇	【創作】	「異境の追憶」	文乙	13回	1940年3月		東北法文(法)	威南定平	
		17	1938年10月	金善根	【詩】	「美しき敗北」	文甲	14回	1941年3月		東文(英)	平南順川	
		20	1940年6月	李泰俊	【隨筆】	「M君への手紙」	文乙	16回	1942年9月			東文中退	
	『白線』	15	1939年2月	金在經	【詩】	「獨白」	文乙	中退					
		38	1939年11月	崔定律	【詩】	「文明」	文乙	中退					
第四	『北辰會雜誌』	145	1939年12月	李漢基	【翻訳】	「箱根嶽の少女(李光洙作)」	文乙	53回	1941年3月	徹文	東法(法)	木浦府	
松本	『山脈』	46	1940年2月	宋範儀	【創作】	「早春」	文乙	20回	1941年3月	京城一高普	東文(社会)	京城府	
		47	1940年6月	宋範儀	【創作】	「朴和龍」							
		18	1940年3月	宋青志	【詩】	「韋廉の庭」	【詩】	「惡の種子」					宋範儀の筆名か
				宋青志	【創作】	「奉陽城」						宋範儀の筆名か	
三高	『嶽水會雜誌』	91	1925年?月	金斗籍	【論説】	「動く魂と生活」	文甲		1926年3月	錦城中			
		127	1938年2月	盧永穆	【論説】	「道徳と歴史 —普遍妥協なき道徳律—」	文甲		1939年3月	釜山中	東法		
		129	1938年11月	盧永穆	【論説】	「獨伊に於ける政治と經濟」							
		132	1939年11月	朴仁植	【論説】	「文藝における『問題』 の提出」	文甲		1941年3月	東萊高普	東経		
『嶽水』	6	1942年7月	高照旭	【詩】	「春の自然に寄す」	文甲		1944年9月	京畿中				
姫路	『校友会雑誌』	12	1936年3月	金鳳昊	【隨筆】	「郷土を廻りて」	文甲	12回	1938年3月	浪速中	東法	全南濟州	
		16	1938年2月	徐起源	【論説】	「高校生に於ける批判的精神」	文甲	12回	1938年3月	光州高普	京法	全南海南	
		18	1939年2月	劉基天	【論説】	「近代哲學に於ける進化觀念の影響」	文甲	13回	1939年3月	崇崇中	東法	平塚府	
		20	1940年3月	李相均	【翻訳】	「英國内部の諸問題 W William Ralph Inge著」	文甲	14回	1940年3月	京城一高普	東法	京城府	
六高	『報國團誌』	3	1942年7月	玉川 忠	【論説】	「愛としての友情」	理甲	41回	1942年9月	京畿中	東理	劉忠錫の創氏名	
広島	『皆實』	9	1930年6月	申鉉晃	【創作】	「貧しき兄妹」	文甲	中退		平壤高普			
松江	『校友会雑誌』	16	1930年3月	朴永仁	【論説】	「映畫音樂に就いて」	文甲	8回	1931年3月	釜山中	東文(美)	舞踏家・邦正美	
		17	1930年12月	朴永仁	【論説】	「映畫音樂の實際」							
		22	1933年3月	李魯幸	【隨筆】	「筆の動くに任かせて」	文甲	11回	1934年3月	養正高普	京法		
山口	『校友会雑誌』	25	1931年7月	任澤宰	【論説】	「朝鮮を知らんとする人へ」	文甲	中退		高敏高普		※全文掲載禁止	
		30	1933年7月	李貞求	【論説】	「藝術的方法の問題」	文甲	13回	1934年3月	元山中	京法・城院		
		44	1939年7月	李鏡龍	【論説】	「ジュリアン・デュヴィヴイ イェについて」	文甲	中退		平壤二中			
松山	『校友会雑誌』	10	1928年11月	金 暁	【創作】	「惡淫芳路」 ※末尾に「二十世紀序曲—蘇 人解脫」に改題の表示					金文鶴の筆名か?		
高知	『學友會雜誌』	3	1926年7月	金麟伊	【論説】	「文化の意義」	文甲	4回	1928年3月	新義州高普	京法	平北出身	
		29	1936年7月	崔龍吉	【論説】	「遠慮論」	文甲	14回	1938年3月	京都二中	京法	全南出身	
		39	1940年7月	金永斗	【創作】	「危狗吠ゆ(親愛する君の某 日の日記を思ひ出す)」	文乙	16回	1941年3月	大邱高普	九法文(法)	慶南出身	
佐賀	『校友会雑誌』	12	1927年10月	金時明	【論説】	「来るべき世紀の革命 原理」	文乙	7回	1929年3月	平壤高普	京法		
		13	1928年10月	李應洙	【詩】	「暁は敵である」	文甲	中退		成興高普			
		15	1929年12月	李應洙	【詩】	「永遠の戦」							
		27(創作6)	1934年4月	李有浩	【論説】	「批評(創作第五號)」	理甲	14回	1936年3月	普成高普	九医	成興府出身	
		29(創作8)	1934年10月	河仁鏡	【創作】	「素描 —或る時代を 過ぎる少年達の—」	?	?	?	金時明(金史良)の筆名か?			
	『卒業記念誌』(文乙)	30(創作9)	1935年10月	具山南符	【詩】	「苦悶」/「凍原」	?	?	?	金時明(金史良)の筆名か?			
	『校友会誌』	32	1936年2月	金時昌	【隨筆】	「荷」	文乙	14回	1936年3月	平壤高普	東文	平塚府	
	『校友会誌』	33	1936年11月	慎道晟	【創作】	「父の家」	文乙	16回	1937年3月	中央高普	東法	京城府出身	
	『暇』	1	1937年6月	慎道晟	【詩】	「三七録より」							
	『校友会誌』	35	1937年12月	慎道晟	【創作】	「淑姉さん」							
『校友会誌』	38	1939年3月	金培潯	【論説】	「安息」/「弟」/「脚愁」/「未 來へ」/「暗夜」								
	38	1939年3月	金培潯	【論説】	「エスプラント史小考」	理乙	17回	1938年3月	京城一高普	京医	威南定平出身		
『嘔鳴』	1	1940年11月	尹世昌	【詩】	「逝く春」/「ライラック」/「失 題」/「夜の湖」	文甲	20回	1942年3月	培材中	京法	京畿龍仁	高麗大教授	
五高	『龍南』	244	1939年6月	韓(毛)勗	【詩】	「利己主義者」	文甲	50回	1941年3月	培材高普	東文(西洋史)	鎮南浦府出身	
		246	1940年3月	李佳烟	【翻訳】	「膝(李孝石作)」	文乙	52回	1942年9月	光州西中	東文(仏文)	木浦府出身	中央大教授